

グローバル時代の真の健康
(The true health of the glocal times)

小松 昭夫
(Akio KOMATSU)

財団法人 人間自然科学研究所

要旨：気功と平和 人は美の認識によって、気付きが生まれ、より正しい知識と判断ができるようになり、進んで行動するようになる。他から認められ、これを繰り返すことにより、「楽しく持続的に生きられる社会の創造」に対して、当事者意識が生まれる。このプロセスの中から気が生まれ、目指すことが確立すると本気になり、他力と融合することで根気が続き想いを具現化、真の心の健康につながる。気功は、形を整えるプロセスの中で、意図的にこの状態をうみ出す方法の一つだと認識している。しかし、心は身体の影響を受けるため、太陽・水・ミネラルの恵みを受けた穀物・植物エネルギーも必要とする。

気功は形から入ると、考えられているふしがあるが、形は二番目で、中庸の行き方を体得することが優先すると考えている。その上で形を整える。それで初めて元気が生まれる。そうすると死ぬまで元気、本気、根気、たのしくゆかいに人生をおくることが出来る。沢山の人がこの様な人生を送るためにも平和は必要不可欠である。

キーワード：生命、元気、気功、根気、平和

Abstract : We get to be going to notice the world around us, and more wise knowledge and judgment by recognition of the beauty as we advance and come to act.

It is accepted by others, and we are concerned of awareness obtains for "social creation to be able to live persistently happily" by repeating this process. Mind is born from this process, it becomes serious, perseverance continues and embodies thought and is connected in true mental health when it establishes it to aim by fusing with outside help. When it is the one of the methods that begins to produce this state intentionally, I recognize the qigong in a process to fix the form. However, the heart needs cereals / the plant energy that received the alms of the sun / water / the mineral to be affected by the body. Although it is generally thought that qigong begins with form, the best way to master it is to go with the Golden Mean. Form and good health will then follow. With that in mind, I fix the form. Thus spirit is born for the first time. Then spirit, seriousness, perseverance are pleasant and can spend the life pleasantly till I die.

The peace is essential so that a lot of people spend such life.

Keyword: life, good health, qigong, spirit, peace

中庸の体得

中庸の「庸」は変わらないこと。我々は地球の陸の上に住んでおり、生命であり、人類である。これは変わらない。生命は、個の保全、種の持続という、二つの特性を持っており、生を受ければ、死は宿命である。そして我々は哺乳類の中の人類。人類は、他の哺乳類とは違い、未熟児の状態で生まれてくる。これが他の哺乳類と決定的に違う。他の哺乳類は生まれるとすぐに立ち、自ら食の確保をすることにより、脳の中に宿命自立回路が形成される。人類は依存の状態ですべての世の中に生まれ、

脳の中に宿命依存回路が形成される。

「中」は偏らないことを指す。生まれてから死までの二点間が人生である。死を迎える時の状況を脳の中に確立する事により、脳の自動制御復元回路が生まれ、楽しく生きられるようになる。どのように死ぬかということイメージし、なるべく早くそういう状態を作り上げ、その状態を保持する。どのように死ぬか。元気で長生きで、多くの人に認められ、感謝の気持ちで死ぬ。そのような最後を迎えるにはどうすればよいかを学び、仮説をつくる。そのプロセスを経験という。プロセス

があって行動する、それが経験。それなしで得られたものを体験という。これは両方ともに必要である。

核拡散、ブロードバンドの時代の元気、中庸の体得とは

人類はサイエンスとテクノロジーの発達によってこれまで経験していなかった局面に直面している。すなわち飛行機によって世界中どこにでも短期間で出かけることができ、コンピュータの発明とブロードバンドによって瞬時に大量の情報をやり取りすることができるようになった。これが地球規模の分業を生み出している。核兵器の発明によって大国には人類の命運を左右する管理責任が課され、さらに今世紀に入り、核保有を宣言する国が増え続けるいわゆる核拡散の状態に入った。

狩猟社会では王がおらず、個々が特性を生かして共通の目的を達成するパートナーシップ社会であったといわれている。それが農業をやるようになってからは、土地の利用をめぐる側とされる側という社会になってきた。そして食糧の備蓄とその再分配によって権力が生まれた。

人類は肉体・本能的には極めて弱い生命体であるにも拘らず火、言葉、分業の3要素によって今日の繁栄に至った。火は火薬を、そして核を生み、今日では核拡散により、崩壊の危機に直面している。一方、言葉は文字・印刷を生み出し、通信技術の発達によって、世界的規模でインターネット・ブロードバンドの時代に入った。

先進国は、金融と不動産が中心の経済となり、人類の1%に世界の半分の富が集中する状況を迎えている。持つものと、持たざるものの差がますます開き、持たざる人々が急増、社会の不安定化が急速に進んでいる。これが進めば、いずれは人類全体が破滅に至ることは、明らかである。破滅に至らないようにするには、ブロードバンドを背景に、対立の文化から、パートナーシップによる共生文化に移行する事が不可欠である。

先ごろ訪問した韓国の慶熙(キョンヒ)大学では、このパートナーシップの時代を、「当然にして行き着く」を表した英語 OUGHT TO (アウト・トゥー) と、ユートピアを組み合わせた造語「オートピア」の世界であると表現し、ロゴマークを20年掛けて建築した「平和の殿堂」に掲げている。このロゴマークは、HNS グループのロゴマーク「スターピース」とよく似ていた。つまり、同じ想いを持った人たちが、地球規模で世界同時多発し、ブロードバンド、ネットワークによってその人々の想いと想いが出会い、エネルギーが生まれ、

次の時代が始まる時がきたのである。

国連の中で拒否権を持つ中国と露国、米国の三大核大国に囲まれた韓国・北朝鮮と、日本中国四国地方の連携により、この地域からグローバル時代における平和への流れが始まる。

世界の中で紛争、緊張地帯はたくさんあるが、なぜこの地域なのかと問われる。それは、六カ国協議と北朝鮮の国内情勢により、北朝鮮における核保有の是非が制御されやすい状態にある。韓国、日本にも米国、中国、露国の中で、制御機能が働く。この状況によって世界で始めての、核放棄による平和が、この地域に生まれる可能性が高まっている。

これが実現すれば、困難な状況に直面している中東や、他の紛争地帯にも、勇気を与える事ができる。

日本は多くのアジア諸国にとって加害国であるという立場から、未来志向で積極的に被害国に働きかけ、恒久平和へのうねりを起こすことが日本国内の諸問題解決の入り口になる。今までの人間自然科学研究所の活動は、平和プロジェクトの構想を被害国の方々に聴く耳を持っていただくための、心のインフラ整備であった。

もうひとつ重要なことは、この地域は儒教が共通のベースにある。これが一神教の土地では出来ない。中国、韓国、北朝鮮、日本は一神教の文化ではなく、一神教といわれている露国、米国も文化の複合国家になっている。

なぜ一神教が生まれたか。人類は、宿命依存回路の中で生きる生命体であり、環境により、限りなく悪魔にも近づき、限りなく神にも近づく生命体です。気付きから相互依存を体得することによって、進化が始まる。

食の得にくい砂漠、草原という厳しい生存環境のヨーロッパでは、極限状態に陥ったとき、秩序を維持し、再起できる環境を維持するために一神教が生まれた。

食が比較的得やすいアジアでは、怨念を合理的に活かした中国、怨念を蓄え、制御した朝鮮、被害者の怨念を加害者が鎮魂する事によって日本が生まれた。

核の拡散と、ブロードバンドの時代を迎え、人類歴史上初めて、大衆レベルの大交流時代を迎えた今、一神教が互いの対立に、終止符を打つときが来ている。そのためには一神教で無い地域にモデルを作る必要がある。怨念は加害者と被害者が、共通の目的に向かったパートナーシップにより、昇華へと導くことが出来る。

人類の特性「たのしく持続的に生きる」

生命の特性は個の保全と種の持続であり、人類はこれに、たのしく生きたいという特性を兼ね備えている。論語の中に「知ってやる人は好きでやる人にはかなわない。好きでやる人は楽しんでやる人にはかなわない」とある。論語は飢餓と殺戮の時代に書かれた。人類究極の目的は楽しく持続的な社会をつくるということである。次々とパートナーシップが生まれ、新しい知が生まれる。そうすると愉快というレベルになる。そうすると次から次へと良いアイデアが生まれ、実行せずにはいられない状況になり、生涯善の循環がおこる。その入り口がまず美の認識と、当事者意識。そして善、最後に真。ある分野で一通りこれを経験すると、次は異分野に向けて、真善美の追求から循環が始まる。まずきれいなものを見、そうでないものを見る、そして、行動し、その結果を評価されることによって分別脳回路ができる。すなわち、善悪の判断が出来るようになる。災いの認識から、福をうみだすための閃きが生まれ、その具現化のための仮説を作ることができる。それが真である。老子の言葉にあるように、ひらめきは仮説を生み、仮説より、ゼロから1が生まれ、1は2を、2は3、3は万物を生じる。災い転じて福と成すという脳回路が形成されれば、健康を賜った状態になる。よって、人生・社会には、無駄なものは何も無いということになる。

大きく困難な問題の解決のために加害者と被害者が一緒になって取り組む。これが真の健康の入り口である。

和諧世界の意味

いま、中国のどこにでも掲げられている和諧とは、「一步一步」「早く」「調和」という意味が込められているのではないかと認識している。韓国、北朝鮮、日本、中国、米国、露国、この中で最も言論の自由があるのが日本である。この日本の現状と、加害国であるという立場を最大限に活かす知恵と、勇気が問われている。自ら立ち向かうことが健康を賜る入り口となる。

地球が宇宙の高エネルギー帯であるフォトンベルトに入るのが、2012年12月であるといわれている。それと2013年、平成25年に朝日を象徴する伊勢神宮と、私の故郷にあり、夕日を示す代表的な神殿である出雲大社が、同時に遷宮を迎える。時間はあまり残されておらず、これから起きる変化は急激であると予想される。2年前から始まった、中国の「和諧」運動と、出雲大社で生まれた「和譲」を、実践プロジェクトとして掲げる人間

自然科学研究所の活動は、まさに時を得たものと考えている。

今、中東が大変な状態である。韓国も日本も戦後安い石油を大量に供給してもらい、また働く現場を提供していただいたことで、中東に大変にお世話になっている。私たちが平和のモデルを生み出すことは、中東に恩返しをすることにも繋がる。それは核拡散に対し、人類的責任がある米国、露国、そして中国にとっても重要なコンセプトではないだろうか。

戦争には戦前責任、戦争責任、戦後責任の三つがある。戦後に生まれた世代である私たちには、先輩から鉄道や金融など多くの有形無形の財産を受け継いでいる以上、戦後責任がある。平和のモデルを世界最初に生み出すコンセプト、コンテンツ、キャラクターをもってみなさんに問い、加害者であるという立場を踏まえて共同作業を始めるのが、戦後責任のある日本人の責務ではないだろうか。そこからグローバル時代における国家の方針や、研究所、自治体、学校、企業、そして、国民一人ひとりの果たすべき役割が見えてくる。そしてまた、ここから、愛国心や、生きる意味と役割が生まれ、真の健康を賜ることに繋がると考えている。もちろん和諧・和譲世界がなければ個の健康はありえない。

プロフィール



名前 小松 昭夫 (AKIO KOMATSU)
所属 財団法人人間自然科学研究所
連絡先 島根県松江市乃木福富町735-188
TEL: 0852-32-3636/FAX: 0852-32-3620
E-mail: akio@komatsuelec.co.jp
<http://www.hns.gr.jp/>

略歴: 1944年島根県生まれ、1963年佐藤造機株式会社に入社。中央研究所において農業機械の研究開発に従事。1973年小松電機産業を創業。シートシャッター「門番」、集落排水計測、制御、監視システム「やくも水神」を開発、全国展開。社是は「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」。1994年社会問題の研究と企業活動を通じて問題の解決できる人材養成機関を目指してHNS研究所(現(財)人間自然科学研究所)を設立、会社経営のみならず国内外の社会問題に対して、平和、環境、健康をテーマとして積極的に提言・活動している。財団法人人間自然科学研究所理事長、小松電機産業株式会社代表取締役。

受賞記録: 1990 中小企業研究センター賞

- 1991 ニュービジネス大賞
- 1992 優秀経営者顕彰 地域社会貢献者賞
- 1995 科学技術庁長官 注目発明選定証
- 1996 地域活性化貢献企業賞